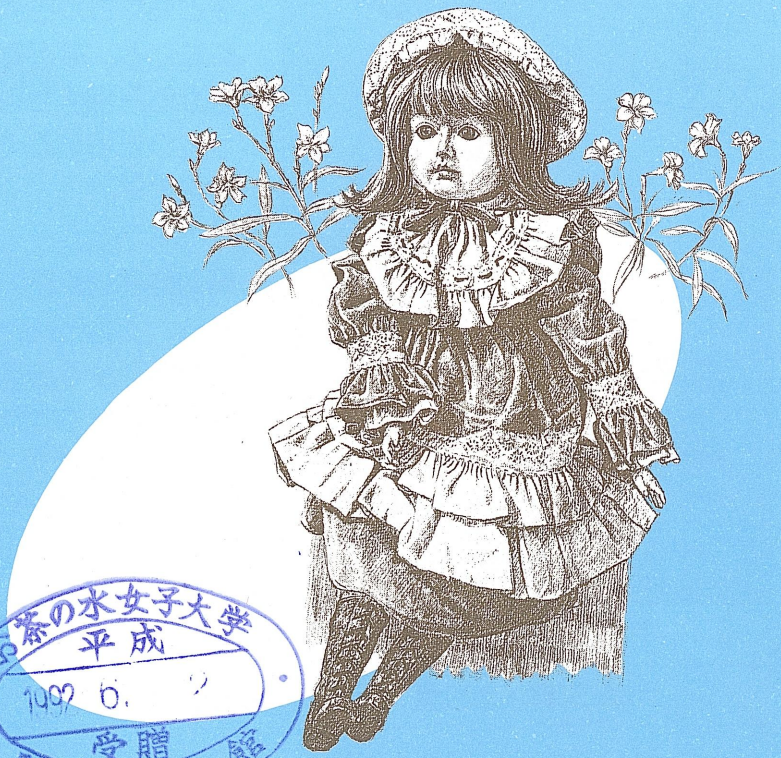
幼児の教育　第91巻　第７号　平成４年７月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN 0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 7



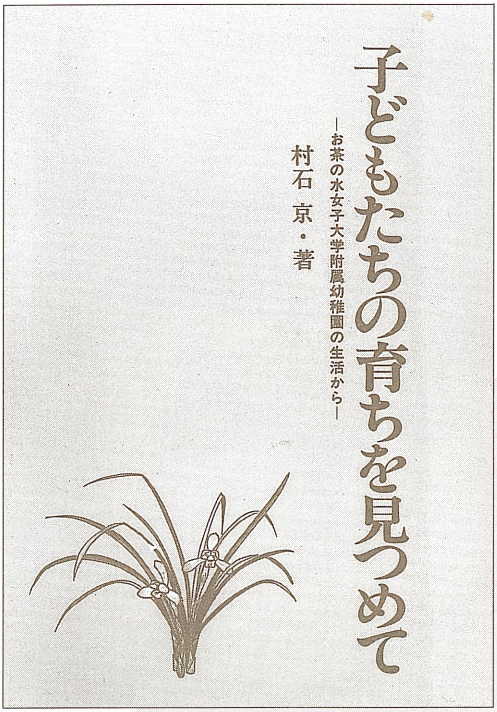
奈良女子大学
平成
1992 6. 2
受贈
附属図書館

第91巻　第７号　日本幼稚園協会

お茶の水女子大学附属幼稚園の生活から

子どもたちの育ちを見つめて

新教育要領の精神を従来から実践している園での子どもの生活と保育者としての思いを述べる。



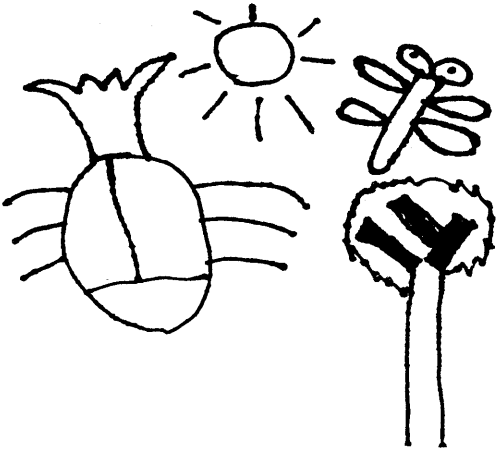
幼児教育の基本の考え方、教育課程の実例、子どもたちから教えられたこと、など基本理念から日常までを、じっくりと語ってくれる図書です。
元お茶の水女子大学附属幼稚園副園長の立場から、この伝統ある園の教育理論から実際までが、分かりやすく汲みとれる書です。

A5判・220頁・定価1,600円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第91巻　第７号

幼児の教育

目次

——第九十一巻　第七号——

写真・子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉保育にバランス感覚を……秋山　和夫…（6）

深淵にみえる所にも温かい光がある……津守　真…（8）

特集〈星・七夕〉

天の川の話……近藤　雅之…（14）

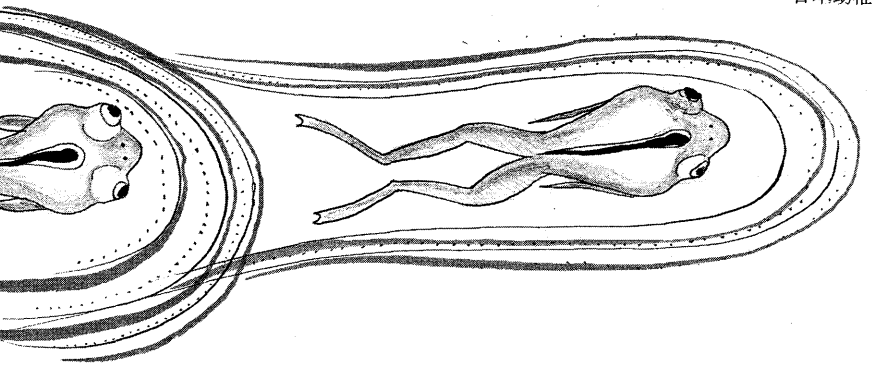
心のふるさと～七夕飾りは七種の品々で～……多田　信作…（17）

七夕——星のつらなり、人のつらなり……猿渡英理子…（22）

『星の子』が投じる問い……森下みさ子…（26）

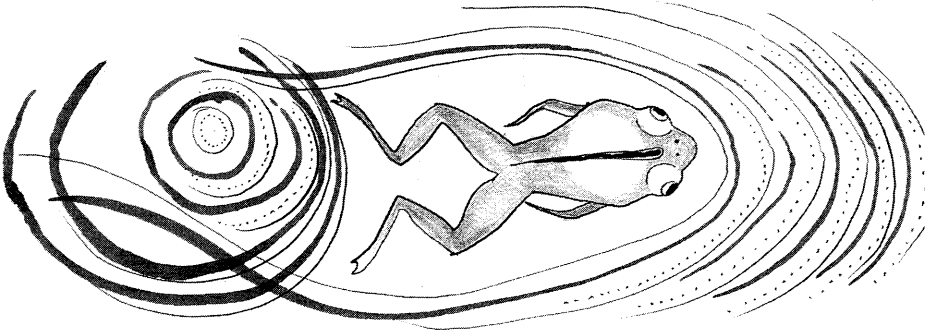
松本の七夕人形……美谷島いく子…（30）

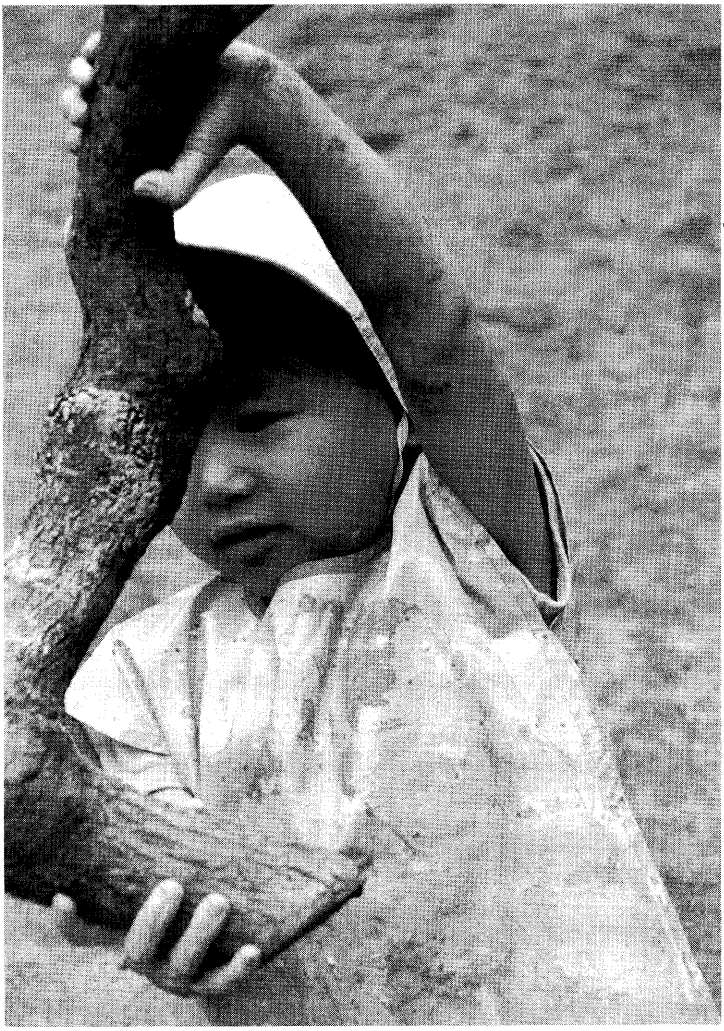
© 1992
日本幼稚園協会



空を見る……三木　紀人…（38）
庭の番人～なつ～　緑・蔭・憩……土橋　光子（40）
保育への視座(4)　若い保育者の方々へ……河邊　杲…（45）
故国を後にして(7)　知りてなお投げむ一塊(かい)の石……モーレンカンプふゆこ…（50）
ある日の育児日記から(19)……佐藤　和代…（54）
幼児の笑いとその保育における意味(4)　四歳児の笑い……友定　啓子…（55）

表紙・平野　清／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／吉岡　晶子・岩上　節子
編集部・大沢　啓子





子供讃歌

ぐちゃぐちゃ　おもしろいな！

撮影・平野　清

〈巻頭言〉

保育にバランス感覚を

秋山　和夫

新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針に基づいた実践が軌道にのってきている。新しい要領や指針は、幼児保育の本質についての考え方や、保育方法についての具体的な手がかりを明確に提示した点で、評価すべきものであると考えている。

しかし、現場の実践場面においては、必ずしも、その精神が十分理解されないで、さまざまな誤解も生まれている。そのようなものを少し紹介してみよう。

「幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じる」保育が大切だということで、幼児を一か所に集めてはならない。

「幼児の主体的な活動」を中心に指導を展開していかなければならないので、保育者が指示や命令をすることによって、幼児を活動させてはならない。

「環境を通して」保育を行うべきであるので、環境の準備は極めて大切である。保育者の援助というのは、幼児が環境とのかかわりにおいて活動を始めた後で、保育者が行うべきことである。この場合、幼児が活動を始めようとしない場合、保育者はどうすればよいのか。

このような誤解は一般的でないのかもしれない。しかし、保育方法についての話し合いが、たて前の議論から、本音の話し合いに入るに従って、そうし

た疑問がポツリ、ポツリと出される。

たしかに、新しい要領や指針は、指示・命令型の、あるいは、画一的な保育の克服をめざしている。そのために「幼児の主体的な活動」とか「環境を通して」とか「幼児一人一人」「個人差」といったことばや表現が、新しい保育のキー・ワードとして重要視されることになる。そのことは正しい。

しかし、保育の実践を行う場合に、そのことだけで、望ましい保育ができるとは言えない。幼児を一か所に集めて、保育者が幼児に指示を与えることも必要となる。幼児全員が同じ活動をすることも不必要だとは言えない。保育者がリーダーシップをとって、幼児と遊ぶことも必要になることもある。

自分の好きな活動を主体的に行えるが、保育者の指示する活動は絶対に行わないといった幼児では困るのである。

「指示・命令」はだめで、「助言・方向づけ」でなければならないという「あれか」「これか」という二極構造の中で、どちらかの極に立って、他方の極の考え方は否定されるべきであるという発想は、克服されるべきである。

例えば指示・命令型の画一的な保育が主流であったので、これを改善するために、幼児の主体性や個人差を大切にし、環境を通しての保育をもっと重視していこう、という観点に立つべきであろう。

これまでの保育をより良くしていくために、新しい考え方や視点を導入していこうということであって欲しい。弁証法でいう、正反合の精神で、保育実践への理論の導入を考えていくことが必要ではないか。

バランスのとれた幼児を育てていくために、保育者自身がバランス感覚を磨いていくことが何よりも望まれる現在である。

（岡山大学）

深淵にみえる所にも温かい光がある

津守　真

三学期の末、私はやや手持ち無沙汰に、子どもたちがそれぞれにのびやかに遊んでいるのを見ていた。三月ともなると、ひとときではあるが、そんな時間が与えられる。私は、どの子どももかつて混乱の時期を経てきたことを思った。殊に今年は、幼児期から八年も九年も私共の学校で過ごしている小学部を卒業する子どもが何人もいた。いまどの子も平穏のうちにいるようにみえるが、ある時期には、親も子も行き止まりの道に立って、生きる意味を見失っているようなときがあった。そんなときは親子共に本当に真剣で、私共も一緒になって悩んだけれども、やがてそれは行き止まりの道ではなかったことを、子も親も、そして私共も知った。卒業してゆく子どもたちを見ながら、それぞれの通った経路は

違いながら、どの人もこのことについては共通であると思った。そして、子どもたちの卒業にあたって、学校はどのような場であるのかをもう一度考え直した。

一、学校は真剣に人生を生きる場

子どもたちは、例外なしにどの子も、どんなに幼くとも、まじめに真剣に人生を生きている。私共は、学校の場で、子どもたちがそれぞれに自分らしく生きることを願う。たとえ、大人の観点からはふまじめに見えるときも、子どもは真剣に自分の道を探している。この子どもたちをかかえる親も、毎日、精一杯の生活をしながら子どもを学校に連れてくる。その真剣さに出会って、私共もまた自らの生き方を問い直される。日々遭遇するできごとを通して、自分自身にとっての本当の生き方を発見してゆくことができなかったら、学校の教師の方が子と親に取り残されてしまう。学校はそこに集うすべての人にとって、自分自身が成長する場である。

二、存在の危うさを支える場

眼を八、九年前に転じるとき、たくさんの子どもたちが、自らの存在が崩れてしまうかもしれない深淵の際（きわ）に立っていた。混沌の霧の中をさ迷っているように思える子どもたちもいた。殊更に周囲の大人たちに受けいれられ難い行動をすることによって、自分がどん

なに辛い境遇に立たされているかを私共に知らせているように見える子どももいた。その子どもたちが、自分が存在する意味を見出すようになるのは、その危ういときを支える大人を必要とした。自らの存在が危ういとき、人は自分のことだけで心が一杯になる。そのときの思いは自分だけの幻想であることが多く、現実には、助けてくれる他人が何人もいるのに気付かない。そのことを発見すると、深淵の際と思っていた所が、温かい陽のあたる場所にかわる。次第に皆がそのことに気付くとき、そこは人々にとって住み心地のよい場所になる。教育の場はこのような意味で楽園である。

だが、一見平穏が訪れたように見えるその時にも、人は常に深淵のふちに立っていることにはかわらない。そこで危うさを支えてもらった体験をした人は、新たな危うさに遭遇するときに、もはや以前ほどに他人に支えられなくとも、自分を自分で支えられる者になっている。そして、次には、他人を支えうる人となる。これが保育者である。

三、今日を生きる場

保育者は、いま眼前に起こっていることに対して前向きに明るく取り組むことを、意志をもって選択する。そこから子どもと大人との両者の明日が創造される。過去へのこだわりはあっても、それは一時わきにおいて、新たな「いま」に取り組むことから次の瞬間がつくられる。また、だれにも未来への不安はある程度避けられないが、そのことを先にし

たら「いま」の必要が見えなくなってしまう。「いま」とどう取り組むかによって、過去も未来も変貌する。このことは、保育という、人生を凝縮したような場にいるとはっきり分かる。

私の学校のひとりの職員のご主人が、自分の経営する会社に都立の養護学校の高等部の卒業生を雇われた。その子はいろいろのことができるのだが、いつでも、この次は何をするの？　明日はどうするの？　と言って、「いま」がないからつまらないと最近私に話して下さった。養護学校の卒業生にとっては、就職という目標を達成すると、その点では成功者と言えるが、人生はそこが終点ではなくて、むしろその先が長いのである。教育の目標は、将来就職できるようにすることにあるのではなく、人生のどの時期にも、いつでもいまを充実して生きられるようにと考えることの方がより現実的である。今日与えられているものを、意味あるものとして受け感謝しよう。

四、学校は人生の一部

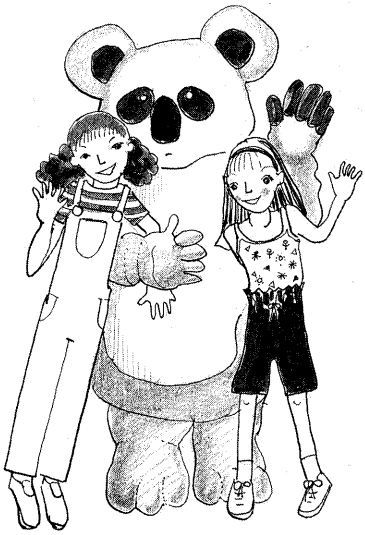
私共の養護学校の子どもたちは、小学部を卒業すると、地域の養護学校や特殊学級に進む。これから進む学校では、子どもが自分らしく生きることを許されない場合があるかもしれない。しかし、初等教育の段階で、生きる基本を学んだ者は、新しい環境に興味をもち、それに挑戦し、そこに新たな意味を見出してゆく力があると思う。私は何人もの親た

ちから、この学校に中等部、高等部があったらどんなに安心かと言われたし、私もかつてそう思ったことがある。けれども、そうしたら同じような環境の中に子どもを囲いこんでしまうことになりかねない。むしろ、より広い社会に送り出して、親子が新しい世界を開いてゆくことに手助けする方がよいのではないか。障害をもった子どもの場合も、これからの時代には、今までよりも多様な生活の仕方が可能であろう。そして家庭を含めた生活全体の中で、子どもはどんな環境にも立ち向かってゆく力を一層身につけてゆけるにちがいない。学校は子どもの生活の一部であり、人生の一部である。学校を終えてから更に長い人生を、障害があっても成熟した人間として、一緒にたのしんで生きられる社会を作ってゆくことを私共の課題としたい。

八年、九年以前には幼児だった子どもたちが、早くも小学部を卒業して次の段階に向かおうとしている。長い期間育ててきた者には、それ以外にはやれなかったという開き直りとともに、他方、不十分のまま途中で送り出すので、心配と謙虚な思いが残る。しかし、この後はこれまでのことをもとにして親子の選択によって切り開いてゆく部分が大きい。そして新たな危うさに遭遇するときには、また別の助け手があらわれるにちがいない。送り出した者は、その後はより成熟した、一層対等な者同士として、部分的な助け合いを必要とする時がくるかもしれない。そのときには幸いな再会となるであろう。

卒業する子どもたちを送り出すにあたって、この後、親と子が新たに遭遇する深淵の際にも、温かい光があり花が咲いているのを発見するであろうことを私は信じたい。

（愛育養護学校）



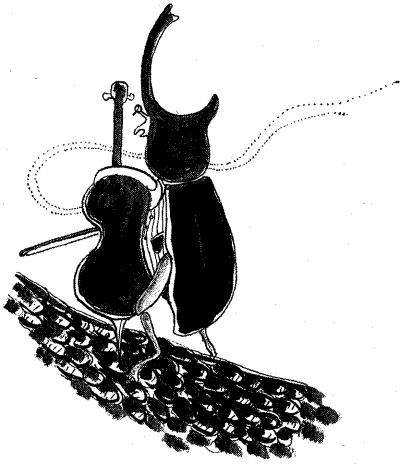
特集〈星・七夕〉

天の川の話

近藤　雅之

子どもの頃、九時になると火星があがってくるときいて、夏休み中頑張ったことがある。他方、早起き競争もしていたので、どうしても九時までもたずにひっくりかえってしまった。それまでそのころはまだよく見ていると天の川を眺めあかしていた。こうして見ていると天の川は天球上をうねうねと流れる帯に見える。よく注意する人はわかるが、天の川はうねりや細くなり太くなりはあっても天球上を一まわりしているのである。

ガリレオが望遠鏡を作ったとき、天の川はいっぱい星の集まったものだということを見つけた。一八世紀終わり近くハーシェルが次の大きい進歩を齎(もたら)した。ハーシェルは天王星の発見で有名だが、そのほかにも多くの仕事をしている。彼は星の帯である天の川を見て



はじめて銀河系の形を描いてみせた。彼は二つの星がまわり合う二重星の研究もしているから、星にはいろいろの明るさのものがあることはよく知っていた。しかし、まずどの星も等しい明るさと仮定しよう。暗い星ほど遠くにあると考えるのである。天のいくつもの区域で、明るさごとの星の数を数える。そうするとどの方向がどのくらい遠くまで拡がっているかがわかることになる。ハーシェルはわれわれの見る星の全体が中厚のレンズのような形に集まっていることを示したのである。

天の川は太さだけでなく明るさも一様でない帯である。夏の夕の南の方向、射手座とか蠍座あたりの銀河は一番目立つし、真反対の双子座あたりはかなり淋しい銀河である。実際、射手座の方に銀河系の中心部があり、ふつうの光では吸収がひどいが、赤外線や電波ではもっと立派に見える。光でも射手座が中天高く見える南方に行けば、銀河系の中心と納得できる。

天の川は銀河赤道という言葉があるように一まわりしているのだが、その北極にあたるところは髪座という星座にある。その髪座がわれわれの頭上近くにくる時刻になると、ちょうど天の川が地平線近くで一周することになる。こういうことは実感してなかったのでとある冬の夜半すぎ、望遠鏡の回廊から北の山際が異様に明るいので何かと目を凝らし、しばらくして天の川と気付いて驚いた。四周に天の川が見えるのである。自分が銀河円盤の上にいる感じ、天上の音楽が聞こえてくるようであった。もっともこんなに見える

のは中緯度にいるものの特権で、高緯度や熱帯では天の川全周を一度に見ることはできない。

もひとつ、関連して思い出したこと。まず北を向いていたせいか、佐渡に横たふ天の川を思いだした。小学校で最初に俳句を習う数句のなかに出てきておかしくない有名な句。しかしわたくしは横たふという言葉にずっとこだわってきた。この句は中天から銀河が落ちかかると捉えられてきただろう。天球を野と見做しそのなかを流れる川を横たふと表現する。ほんとのところは垂直に近く立っている形を横たふというのだろうかというこだわりである。嘱目の風景を表す言葉としては適当でない。頭のなかを通過した表現になってしまう。もちろん、いわゆる嘱目吟ではない訳だけれども。文庫本の『奥の細道』程度ではいくら読んでもこの句が何時作られたのか、はっきりしたことがわからない。本文で七夕前後に置かれたのは厳然たる事実だけれども。わたくしは、もすこし前の季節に夜半目覚めた芭蕉翁が後架の窓からでもあれは何だろうとやはりいぶかしく思ったとでも考えてしまうのである。

火星のことは今にはっきりと記憶している。しかし、七夕に彦星が川を渡るか見ようとしたという記憶はない。さすがに小学生でも、そんなことは考えなくなっていたのだろう。逆に盈盈一水間脈脈不得語という詩はかなりはやく知っていたようである。

（天文学研究者）

心のふるさと
七夕飾りは七種の品々で

多田　信作

◇日本人が作りあげた節供のまつり

明治三十八年（一九〇五年）菊地貴一郎著『江戸府内絵本風俗往来』をひもとくと「七夕祭――毎年七月七日は七夕祭とて、色紙ゆわいつけたる竹にほおずきをいくつか珠玉のようにつらねて結び、また色紙を切り、網状に作り、それで吹き流しにしたり、又、紙で作りたる硯、筆、つづみ、大鼓（おおつづみ）、算盤、更に大福帳、又、西瓜の切り形などをくくりつけ屋上に高く立てているようである。そのあと夕方か翌朝には一本残らず取りはらい、川か海に流す」などと記されている。又文政十三年（一八三〇年）喜多村信節著『嬉遊笑覧』にも「短冊に短歌や和歌などを記し、併せていろいろなものもつるす」などと表記されて

いる。広重の『名所江戸百景』にも七夕祭浮世絵をとおして、江戸後期の七夕竹飾りがどんなものであったかが推察される。

唯これらの文献、資料をとおしてみると、おもしろいことに、七夕飾りは、七種の品々が主要であったようである。

①吹き流し…機織姫、織女星のドラマであるから、糸を形どり飾りとする。

②折鶴…自家の一番年長者の年の数だけ折り長生きを祈る。

③短冊…願いごとを必ず墨で書き、自分の願いときれいな字そのものを奉納した。

④投網…魚をとる網を形どり、豊

▲　江戸末期、錦絵の中の七夕飾り

丁寧にみて下さると、飾りものに、大変特徴があります。

作大漁を祈った。

⑤屑篭…飾りを作るときにでた紙屑を入れて吊るし、物の始末をきちんと教えた。

⑥着物…自分の身を守ってくれる着物に感謝し、併せて裁縫が上手になることを祈る。

⑦巾着…お金を蓄え、無駄遣いを慎むよう

など七つの願いと考えを飾りに託した先達の表現形式は今日でも息づいている。このような形式（スタイル）はいつ頃から発生し定着したかは定かではない。

唯五節供のうちの七夕節供は、もともと故事とされる牽牛・織女の二星の恋物語を中心に展開され、それらが万葉集の中でも、声高く七夕歌としてよみあげられているが、更に古文書をひもとくと『続日本紀』和銅三年（六九一年）など史実には七月節供は相撲節供であったという事実にでくわす。相撲節供の折、詩宴がくりひろげられ、その中で恋物語が詠われたのではないかと推察される。

◇七夕飾り七点の様式について

「飾り竹」 江戸時代から明治にかけて、七夕祭のための竹売り、笹竹売りが巷を行商してあるき、大きなものでは特大の孟宗竹なども大八車に積んで、売り声とともにぎわしたらしい。しかし、古い文献をみても、何故竹や笹なのかが定かではないのが残念である。

「竹飾りの短冊」 色紙の短冊に詩歌や願いごとなどを記すことも今日も変わりないが、こ

の短冊に記すとき、必ず芋の葉の露をとり集め硯に入れ、墨をすることは、最近ではすたれてしまったようである。

「竹飾りの吹き流し」 これは願い糸の変身とよむと解りやすい。機織姫織女星の話なので糸を形どり、飾りものとするが、昔は和紙を草木染で彩色したものを利用し、美しい織物を連想させたとのことである。

「竹飾りの着物」 これも願いを込めて作りあげる糸（吹き流し）と同様、着物づくりをとおして、裁縫並びに手芸技法などの上達を願いを込めて作りあげたようである。だから、和紙に草木染で彩色し、実物大の着物を作りあげたりした時代や、地方もあったとのことである。これが今日でも形を変え残っているのが信州松本地方や福島白河などである。

「竹飾りの折鶴」 延命長寿を願う千羽鶴や更に万羽鶴が登場するようになったが、基本は前述したように、自家で一番年長者の年の数だけ折り長生きを祈った。しかし、年の数だけより、十や二十以上折り長寿を祈る風習が生まれ、だんだんと千羽鶴化したようである。

この他、地方々々、それぞれの職業や生活の中から生まれたものが七種の中にとりこまれた。鯛をはじめ宝船、星、更に藁や菰の葉で牛、馬、人形なども作り飾ったようである。

これらを通して推察できることは日本では七夕祭に二面あり、我が国固有の織女信仰と

写真は四百年以上の歴史をもつ大東町（島根県出雲地方）のまつり

大東町の七夕まつりは子ども中心で、8月6日一日かけてまつりを楽しみます。昼は七夕飾り、夕方から小学校校庭に集まり、日没と同時に赤川（大きな河）にむかって行列です。「テンテンテン　テンテコテンのたなばたさん」と歌を大声で唱じ太鼓やお囃子にあわせてねり歩きます。

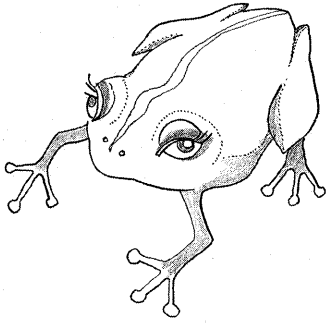
中国より渡ってきた牽牛星、織女星にまつわる伝説が融合して形成されたようである。だから七夕とかきそれをしっせき、又はなぬかのよなどと読んでいた。そして「たなばた」は棚機と記している文献が多い。

しかし七夕飾りは七種飾りが圧倒的である。

（芸術教育研究所・おもちゃ美術館長）

七夕
星のつらなり、人のつらなり

猿渡英理子



昨年の夏、インドネシアに旅をし、絣織物と島の人たちの生活にほんの少しですが触れました。絣織物にはトカゲ、ワニ、花、歴史、物語など原始的な力強い模様が描かれてい

ます。人々の営みから生まれてきた願いや知恵や信仰などが、その時代の織り手の生活をくぐりぬけて織り込まれていきます。魔よけや息災の願い、祖先や精霊（身近な動物など）に守られていることが描かれた布を身にまとった暮らしに、目に見えないものを感じ、大事にしている人たちの力を感じました。

さて、日本にも様々な行事があり、そのほとんどが魔よけとつながりがあり息災を願うものであるようです。子どもが無事に育ち、家族が息災であることが難しかった頃の人々の願いがこめられているのでしょう。丸い鏡餅にこめられた意味を知る時に、祖父母の家でお盆を過ごし迎え火・送り火を焚くことに、民俗資料館にある古いものと大差ないはた（織）の道具を使うことに、私はなんともいえないほっとするようなきもちを味わいます。受け継がれ伝えられてきた知恵や願い、自分もまたそこにつらなっているということを感じるからでしょうか。

七夕も古くから伝えられてきた行事であり、七夕に欠かせない竹は他の年中行事や神事にも度々使われ、魔よけの力があるとされてきたようです。短冊のついた笹飾りを軒下に吊して魔よけにしたり、畑に立てて虫除けにしたところもあり、七夕は子どもの楽しみのためのものではなかったという話も本で読みました。七夕に限らず、ほんの何代か前まで伝わっていた意味が今ではほとんどわからず、ただの〝お子様のお楽しみ〟になってしまったり、商業ベースにのせられて歪んだ形で伝えられてしまうことは悲しいと思いま

す。

私の通う幼稚園でも御多分にもれず七夕の活動があり、大きな竹に飾りをつけます。包装紙を切った折り紙で作った飾りに混ざって、時々、広告紙で作った剣やら、広告から切り取ったヒーローや花の写真などもぶら下がっています。飾り―すてきなもの―（自分の）好きなもの・大事なものという連想が働くのでしょうか。私は普通の飾りとは一風変わったこれらの飾りも大好きです。

七月七日を過ぎ、笹を一枝ずつ持ち帰ったり、川に流す代わりに焼いたあと（細い枝だけ焼いていいところはとっておくのです）、これからが楽しみどころです。思わず腕まくりしてしまいます。日射しの強くなるこの季節、竹で作った水鉄砲は人気物です。梅雨の晴れ間を縫っての水あそびでは、水をたっぷり入れたバケツと水鉄砲を持って追ってきて、立ち止まって水をしこんでからピューとかける子もいて、おなかをかかえて笑っているうちにかけられることもしばしば。輪切りにした竹に米やあずきを入れてマラカス、刻みを入れたり切り込みを入れたり、細く割った竹で楽器づくりも楽しみました。おじさんに竹馬も作ってもらいました。半分に割った竹での青竹踏みは疲れた足にはこたえられません。竹とんぼになったり、朝顔や野菜の支柱になったり、生活の様々な道具にもなり、幼稚園では竹細工は難しいけれど、日本の竹の文化をこの竹三昧の日々に思います。

七夕といえば織姫と彦星の話、星もつきもの。二十数年生きてきた私も今までに一度位

はプラネタリウムを見たことがあるのでしょうが、記憶には残っていません。それよりも、旅先、キャンプで見た満天の星が圧倒的に強い印象を残しています。まっ暗な夜の闇の中での月の明(あかり)は驚く程頼りになります。「月明だけじゃなく、星明というのもいいよ」という友人の話に、私も近いうちに星明も経験したいと思っています。星を見るのは好きなのですが、恥ずかしながら星座でわかるのはオリオン座くらいで星の名に至っては片手にも足りないかもしれません。名前を知ることでそのものに近づけることもあるのだからと、星座の早見表も一応持ってはいますが、今のところただぼんやりと空を眺めるだけでも充分幸せです。子どもたちのいちばん初めの星との出会いはプラネタリウムなどではなく、本物の闇の中の星であってほしいと思います。星の美しさと夜の暗さ、宇宙の広さ、この世の不思議を感じてほしい。では保育の中でどうぞと言われれば、星の夜には気のあった友人たちとお酒を酌み交す方がいいので、とお断りすると思いますが――。

最後に、最近身近で小さいお子さんを事故で亡くされた方があり、私自身やりきれない思いでいっぱいでした。それがひとりの子の言葉で少し楽になりました。

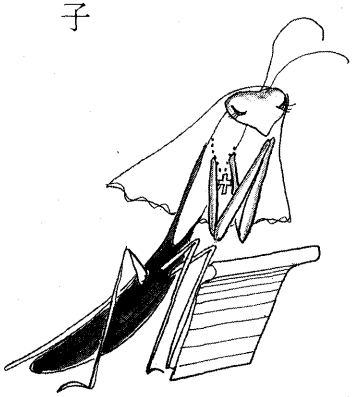
「年寄りは死んだら星になるけれど、○○ちゃんはかわいかったから天使になるんだよ。天使になると天使の幼稚園に行けるから、きっとお空で楽しくしているよ。」

空を見て人は―子どもも大人も―いろいろなことを思います。

（大和郷幼稚園）

『星の子』が投じる問い

森下みさ子



「星の子」という題は、キラキラとなんとかわいらしく響くことだろう。けれど、オスカー・ワイルドがしたためたこの物語は、その響きに反して、つらく悲しく、心の隅にいつまでも問いをしこらせる。なぜ、星の子はこんなにもつらい旅をしいられねばならなかったのだろう。しかも、その果てにようやく得られた国から、なぜたったの三年で逝かねばならなかったのだろう。

星の子が拾われる場面には、キリスト生誕の情景をしのばせるものがある。ある冬の寒い夜、森で道にはぐれた貧しい二人の木こりの前に、星が美しい光の尾をひいて落ちてくるのだ。二人が駆け寄ってみると、そこには金繡（しゅう）の布に包まれた星の子が、すやすやと眠っている。二人の木こりは光を見て金銀をあてこんでいたのだが、ただの捨子とあって

がっかりする。けれど、そのうちの一人が子どもを哀れんで拾い、育てることになるのだ。貧しい者のもとに、天からもたらされた無垢なるみどり児。星の光とともにきたった赤子は、まるで救世主のように映るのだが、キリストとは正反対に、この子は恐ろしい悪魔の性癖を発揮していく。星のように美しく育った子どもは、村の子どもたちを扇動しては弱い者・醜い者・不具を、徹底していじめるのである。あげくに、実の母親であるという女乞食を罵声とともに追いやってしまうのだが、このとき、異変が起こる。星の子は突如蟇蛙のように醜くなって、今度は自分が追いやった母親を訪ねて歩かねばならなくなるのである。星の子は、行くさきざきでいじめられる。自分がかつて醜い者たちにしたと同じ仕打ちが、次から次と星の子に浴びせられる。そればかりか、とある町に入るとすぐに魔術師にとらわれ、白と黄と紅の金を探してくるように命じられる。そんなよるべない星の子を助けてくれるのは、星の子に一度助けられたという子兎である。子兎のおかげで三度とも金を探し当てられたものの、星の子は癩病やみに請われると、魔術師の仕打ちも顧みず、その金をあげてしまう。もはや、魔術師に命を奪われるしかないとなったとき、星の子はきれいな姿に生まれ変わり、人びとの歓呼の声に包まれて王子として迎えられるのである。それでもなお、みずからの罪を悔いて旅立とうとする星の子の前に、女乞食と癩病やみとが現れ、お妃と王に変身をとげる。こうして、星の子はほんとうの両親である王と妃のもとで、情け深く国を治めたという。

星の子の試練は、みずから招いたものとはいえ、あまりにも厳しい。物語であることを差し引いたとしても、一片の救いもないように感じられる。醜くなって、行くさきざきでいじめられ、その上奴隷となって難題を果たさねばならない。物語ならたいてい、ここらへんで救いの手が差し延べられそうなものだ。子兎の恩返しがそれにあたるけれど、いかんせん、これまた癩病やみに金を請われてあげてしまうので、結局手ひどいばつを受けることになる。星の子が救われるのは、最後の最後、みずからの命を投げ出して癩病やみを救わねばならないほどに追い詰められてからである。星の子の試練の旅が、母親たる女乞食を探し求めることに始まり、父親たる癩病やみを命と引き換えに救うことに終わるとすると、これは親から与えられた子どもの試練ということになるだろうか。それにしても、なんて厳しい……。

その厳しい試練の原因は、星の子の美しいがゆえの残酷に求められる。星のように美しい子どもは、みずからを愛するあまり、美しくないものを嘲り、からかい、いじめ抜く。そして、周りの子どもたちもこれを止めるどころか、いい気になって同調するのである。ここにみられる残酷性は、あくまで子どものものであって、大人が謀る悪事とは別のように思われる。星の子の美しさに魅せられ、その残酷な命令に喜々として応じるのが子どもたちであるのは、そのせいであろう。子どもの無垢のなかで共有される「美」と「残酷」は、社会がよってたつ秩序や倫理の手前にあって、激しく輝いてさえいる。燃える星のよ

うに……。それが星なら、あるいはそのままで許されたかもしれない。けれど、地上に降り立った星の子は、その無垢の場からとびだして苦い経験を積み重ねていかなくては、一人の人間とはならないのだ。厳しい試練という経験を経て、星の子は美しさをとりもどす。けれど、それはもちろん以前の美とは異なる。ワイルドは「これまでなかったもの」を、星の子の瞳に宿らせている。「これまでなかったもの」はおそらく、様々な経験を経た後に得られる、より高くて貴い美の輝きであろう。自己愛を拭い去った後、自己以外のすべてのものに注がれる愛の光でもあろうか。私達はここでようやく、一人の人間の完成された姿に出会うのである。

この話の展開は、「無垢」から「経験」を経て「より高貴な無垢」へというワイルドの思想を表しているともとれるが、私には、私達の文化圏にはなじみの薄い西洋的な人間の成長が説かれているように感じられる。私達の文化においては、これほど徹底して孤独な試練が、話の上とはいえ、課せられることがあるだろうか。第一、無垢なる美しい捨子のなかに、それゆえの残酷性を告発することなどできるだろうか。どうももっと甘やかで穏やかな筋だてを期待してしまいそうである。けれど、そんな私の期待を受け付けないばかりか、星の子の話は、さらに恐ろしくも悲しい結末でくくられている。星の子は王子となって治世して三年後に亡くなり、しかも後継者は悪政をしいたと結ばれているのである。子ども向けに書き直された『星の子』では、さすがにこの結末は省かれている。けれ

ど、ワイルドは、この部分も大事な要素として含めて「星の子」の話を仕立てたに相違ない。人間としての完成を経てなお、その苦しみは大きく試練は烈しかったのだろう。本当の安らぎは、この世を去って後、神の御元でのみ与えられるのだろうか。いや、それさえも私が見知らぬ文化に寄せてみる甘やかな解釈にすぎないのかもしれない。ワイルドの目はもっと厳しくこの世をみつめ、人の成長をとらえているのではないだろうか。その厳しさは、凍てついた冬の森に落ちてくる一筋の星の光のように、私にはキラリと輝く問いのまま投げかけられている。

（東京学芸大学）

松本の七夕人形

美谷島いく子

私の幼い日の七夕祭

松本の夏の空は、抜けるように透き通って青く、高く澄み渡る。王ヶ鼻に入道雲がわき立ち、夕立が来る直前に、竹藪を渡る涼やかな風の音を聞いていると、幼い日の七夕祭のことが蘇ってくる。

松本では七夕祭は、月遅れの八月六日・七日に行われる。

蔵の軒下には、竿に干された、薄緑色の干ぴょうが風になびき、坪庭の池の水は、百日紅の大木を映して、桃色に漣立っていた。

六日の朝「七夕様を飾る」と言って、神の依代となる笹竹を、裏の竹藪から祖父に切ってもらい、字が上手になるようにと早起きして集めた里芋の露で磨った墨で、短冊に願い事を書き、紙縒にして笹竹に結び付け、広縁の軒下に縄を張り、七夕人形を何体も吊した。短冊を飾った笹竹は、風にさらさらと音をたてて揺れ、軒先の七夕人形の牽牛星と織女星が、天から舞い降りてきたかのように、風に舞っていた。

牽牛と織女の形をした男女一対の木製の七夕人形に、「七夕様に着物をお貸せする」（「貸小袖」）と言って、母が、私と弟の絹の一つ身の着物を着せて飾ると、華やいで、今年も七夕様がきたと嬉しかった。七夕様に着物をお貸せすると、着物の襟数が増え、着物に不自由しない、裁縫が上達する、子宝に恵まれる、子どもが病気をしない等々の幸運を授かるという。

和紙の上衣と袴の紙雛の男女一対の七夕人形も吊す。

その両端に、「川渡り」「川越し」「足長（あしなが）」と呼ばれる、ユーモラスな顔の、足の長い木製の人形に、着物を尻挟（しつぱさ）み（裾を端折る）して着せて吊す。「七夕に、たとえ三粒でも雨が降ったほうがよい」という伝承があり、雨天の場合、「川渡り」や「足長」が、織女を背負って牽牛の所まで、天の川を渡るのである。

▲　私と弟の着物をお貸せした七夕人形

七夕人形は、七夕雛とも言われ、初子が生まれた家へ、初七夕の折に、羽根親、仲人、親類から「生まれた子どもが健やかに成長すること」を祈って贈られる。私の家の七夕人形は、父の姉（夭折）に山辺林（はやし）の伯母から贈られたものである。この山辺や北安曇郡小谷村では、明治末まで、集落が共同で、男女対の七夕人形を部落の入口へ飾り、祭祀が行われていたが、今では、個々の家毎の行事になっている。今は、七夕人形贈答の風習もすたれてしまったが、人形店街の高妙町（小安寺小路）で買い求めることはできる。

広縁には、机を置き、夕顔、胡瓜、西瓜、南瓜、大角豆等の蔓の伸びる野菜や、桃、葡萄等の初物の果物をお供えした。篩（ふるい）、箕（み）、枡も、豊作を願って供えた。七夕様に御馳走を供えに行くのは、子どもの役目で、食事毎に、できたての、ほうとうや饅頭を、心弾ませて七夕様にあげに行った。

六日の夜は、公民館で花火大会が催された。帰り道、頭上に天の川が横たわり、彦星、織姫星、北斗七星が、大きく輝いていた。

七日は、盆始めで、朝涼しいうちに、分家の人達と一緒にお墓の掃除に行った。

八日の朝、私は、近所の子どもと一緒に、「七夕様を送る」と言って、笹竹とお供え物を持って〝げみ〟と呼んでいた近くの川へ、七夕様を流しに行った。北安曇では、紙の七夕人形を、流し雛のように、川へ流したり、「眠り流し」と言って、眠気も一緒に川へ流す。

松本の商店街では、六日、七日の夕方、浴衣に赤い襷掛けの少女達が、鬼灯提燈を携え、次の「盆々」の歌を歌って町内を練り歩く。

七夕様よ、七夕様よ、
七夕様は無理なことをおしゃる。
柳に駒をつなげとおしゃる。
つながばつなぐ遠慮なく。
つながばつなげホイホイ

（六九町内史）

松本の七夕人形

松本城わきの日本民俗資料館には、江戸時代から松本地方に伝わる「七夕人形コレクション」総数四十五点があり、国の重要民俗資料に指定（一九五五年）されている。

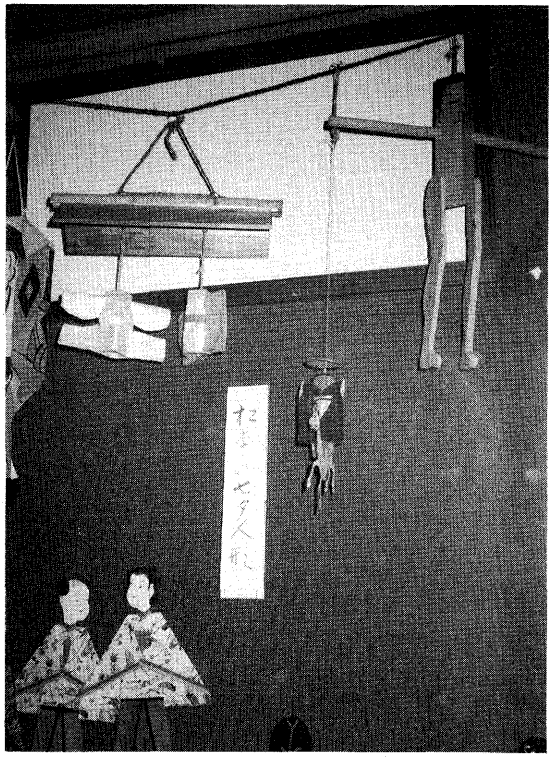
私は、それを初めて眼間した時、子どもの頃から、「七夕様」と呼び親しんでいた、目に見えない神が、こんなにも様々の姿態の人形となって具現化されて、眼前にあることに驚いた。

例えば、黍の芯に、髷を結った髪と、子どもが書いたであろう稚拙な顔、赤紙に青紙を

重ねた着物の十五cm位の女の流し雛形の人形。

木の頭と胴に、大祓(おおはらい)の人形(ひとがた)の紙の着物を重ねた三十cm位の男女一対の人形。五色の着物は、年々新しく貼り重ねられ、二十数枚にも及ぶ。

杉板と竹で屋根形の祠(ほこら)を作り、その中に吊された角材に顔を描き、男は青、女は赤の紙の着物の十cmにも満たぬ素朴な一対の人形。



▲ 七夕人形コレクションから

角材の頭に、髪、眉と目が墨描きされ、鼻と口は刻み目を付け、水浅葱の絹の定紋入りの羽織、茶の袴の三十cm位の男丈の人形。

天駆ける紙の白馬に跨った、貫頭衣風の紙の着物に、日傘をかぶった木の人形。迎え馬に乗り、七夕様が天降る姿であろうか。

七夕の宵を明るく彩ったであろう、竹ひごに和紙を貼った奴(やっこ)燈籠もある。

私は、それまで、七夕人形と言えば、貸小袖形と紙雛形しか知らず、買い求めるものと思っていた。しかし、昔は、七夕祭が近づくと、子どもも、大人も、想像力を自由に羽ばたかせて、このような七夕様の人形を作り、五色の色紙や模様の千代紙で、年毎に新たな装いをさせ、軒先に吊して、願い事をしたのであろう。

七夕人形を飾る風習は、『真澄遊覧記』（天明三年、菅江(すがえ)真澄(ますみ)著）に、「六日より、軒は高なる木にて、めおの(女男)かたしろを造りて糸に曳きはえてけり」と絵入りで記されている。他に『嬉遊笑覧』（文政十三年、喜多村信節著）松本藩水野氏時代の記録『松本御代記』等にも記されており、江戸中期には行われていた。

信濃という古い国名の由来のひとつに、信濃は「志奈斗」であり、風を司る風の神（級長津彦神、級長津姫神）からくると言われ、信濃は風と縁(ゆかり)の深い場所である。

私は、東京から信濃に帰り、風の声の聞き分け方や風の色の見分け方を知っている幼い

娘達と生活するようになってから、季節は、風と共に、秘かに廻りくると感ずることがある。

七夕は、夏と秋との交叉祭。作物を豊かに実らせる神秘的な力を持つ、初秋の風の吹き始める時である。

信濃は松本の七夕人形を飾る風習は、現実的な着物の虫干しの意味の他に、着物に付いた目に見えない穢れを、そして身の穢れをも、七夕人形に託して、秋風に吹き祓って、厄落しをしてもらい、子どもの健やかな成長や、秋の豊穣を祈ったのであろう。

たなばたのうれしからましあしたより
いのり日ぐらしもろ声にして　　真澄

（松本市在住・舞々同人）

空を見る

三木　紀人

仏像や仏画のようなものに接するためには仰角がふさわしい。伏目がちの仏を低い位置からあおぎ見るとき、他の角度からは決してうかがえない圧倒的な存在感で大いなるものがせまってくるようで、われわれは自分たちの小ささを知るのである。

ことは、空との関係についても同様であろう。せわしなく生きるわれわれは、視野の片隅に空をとらえつつ、それを意識することが少なく、天候の変化とか時間の進行に気付くためにその明暗などを注意するのがせいぜいである。しかし、その空を（できれば鮮かなそれを）しげしげとながめて、しばらく対してみれば、突然その空がなつかしいような、したわしいようなものに変貌し、そのことによって日常的な気分からしばらく解放されるはずである。

その思いにひきずられすぎると、無力感とか厭世思想のようなものも生まれかねず、健全な生活のためには少々用心しなければならないのであるが、時には、空を見ることによってよびさまされるものを味わってみるのはよいことであろう。

ただし、空への感性は誰にでもあるものかどうか。八木重吉『秋の瞳』巻頭の詩

息を　殺せ
息を　ころせ
いきを　ころせ
あかんぼが　空を　みる
ああ　空を　みる

などを読むと、それは人間にとって本能的なもののようにも思われるが、感性が形成される時期に、空に注意をうながされる体験があれば、その本人にとっての空の有意性は、よりゆたかなものになっていくであろう。

例えば、歌手として知られる五輪真弓さんはエッセイ「夕焼け」の中で、そのような思い出を語っている。それによると自分は、幼いころのある日、たまたま見た夕映えの空の強烈な印象に打たれ、それからしばらく、夕空をながめるならわしを持ちつづけたという。その結果について

その美しい夕焼け空に、私はいろいろな夢を描き、しだいにそれに魅せられていったのだ。そればかりでなく、私が生きている限り見守ってくれるただ一つの守り神である、と信じるようになったのである。

と記す五輪さんは、幼時に接したのと同じような空を旅行中に見て「戻りたくても戻れるはずのない世界」と再会したように思い、その翌日、この文章を書くことになったのである。

現在の、特に都会の空は、子供たちがそこに夢を描くには汚れすぎていることが多く、また、彼らは何かと忙しく、空をあおぎ見るゆとりなどなかなか持てないでいるだろう。とすると、彼らは将来、空によって過去と再会できそうもないが、では、空に代わる何があるだろうか。

（お茶の水女子大学）

庭の番人〜なつ〜

緑・蔭・憩

土橋　光子

若葉が、散った花の後を追うようにふえはじめました。つい数日前のような気がしていたのにどんどん色を濃くしていきます。葉は大きく枚数もふえて、豊かな緑色が太い桜の木と四辺を包みこむように重なりあっています。太陽も強い光と共に暑さもましてきました。生物にとって、なくてはならないものですが、思わず暑いあついの連発と、水分を求めて止まない毎日が続くようになりました。そんなある日、車庫のビニールトタン屋根に、パラッ、パラッという音を聞くと、急に陽が陰ったように感じて空を見上げましたが変わりもなく、乾いた土と飛び石の縁を蟻が行列して往来しているだけで、雨の気配はあ

りません。今のは何の音？　じっと耳を澄ましていると、やはり小さな音がします。その日はどうしても解らなかったのですが、出先から帰ってきた娘が、ちょっと身ぶるいして、

「ねえ、そろそろ毛虫の季節ね！」

あっ、あの音です。立派でおいしそうになった桜の葉っぱは、毛虫たちにとっても大したご馳走なのです。昨日のあの音は毛虫の排泄物、そう糞です。樹上から落ちてきてトタン屋根をならしはじめたのです。

　この落下物のはじまる少し前頃から、枝をはり緑の濃くなった桜の木蔭は往来する人々が、ほっとひと息する憩いの場所となっていました。私なども町を歩く時、少しでも日射を和げてくれるような木蔭の多い細い道をと、ちょっと遠廻りしてしまいます。

　桜の木は庭の隅で五十歳の誕生を迎えました。少し枝も切られましたが、大木になり、アスファルトの道にせり出してちょっと一息いれる格好の場所になったようです。目的地を目の前にして、木蔭で汗を拭き、ほっとしている様子を見ると、やれやれといった感じが伝わってくる光景を見るのも同じ頃です。

　この頃になると子ども達の登校時間が少しずつ早くなってきています。そんな或る日、ワアワア泣いている幼児と何か言っている母親の声に、ついきき耳をたててしまいました。

「そんなに泣くと、毛虫が落ちてくるよ！」

「ワア！」

そのとたんに前より大きな声になり、私の胸はきゅっと痛くなってきました。幼児も毛虫も迷惑なことだろうなと思ったのです。各々

に理由があって泣き、毛虫もそこにいるのです。幼ない人の泣くわけは、他にあったのでしょうに、もう一つ毛虫が加わって大きくふくれあがってしまったようです。遠ざかっていく声と、頭上を見上げながら、誰にともなく気の毒で、「ごめんね！」とささやいてしまいました。

以前、植木屋さんに毛虫退治の相談をしたのですが、おじさんは「椿の毛虫は抜殻になっても、触るとカセて大変だが、他のは大概だいじょうぶだ。大発生しないかぎり、木が丸坊主になる程、喰っちまわないよ！」と笑われたことがありました。でも私としては、願わくば緑蔭で休んでいる方々の上に、ポトリなんておちないでね、と頼みたい気持ちです。椿の葉は厚くて雨上りなど実にみごとな緑色を陽に光らせているのを見ますと、これを好んで喰べる毛虫が害虫とは、何と皮肉なこと、青虫も毛虫も自分の好きな葉を精一杯たべて成虫になるのです。あげは蝶を卵の時から飼ったことがありますか。親が生みつけた木の葉だけを喰べて成虫になります。

昨年の夏、鉢植えの小さな山椒の葉に幼虫を発見しました。小さい夏ご、蛹で越冬し来春、蝶になります。なんとも小さい青虫です。堅い山椒の葉まで喰べつくしても冬は越せないでしょうと思うほど痩せています。考えた末に、隣りの細い山椒を木ごと近づけて見ました。そしらぬ顔、根くらべとばかり待つこと数十秒でやっと移動開始です。変色しかけた葉まで喰べ尽して、翌日引っ越しました。蛹になるのに丁度よい場所を捜しにいったのでしょう。鳥や小蜂に見つからないといいですね。春には優雅な姿を見せてほしいの

です。

日本は他の国々よりも四季がはっきりしていて、その季節にだけ見せてもらえるドラマが目の前に繰りひろげられます。これらを有るがままに受け取って、子ども達と共に汗を流し、涼をとり、自然が送ってくれるサインを受け止めて、何を語りかけているのか考えとらえ、思いをこらして活動してゆきたいものです。

人が生きてゆく道程に、神は自然を造り、一匹の虫、一本の木や草の中にその生き様を組みこんで、私達の側において教えていられるのだと思います。気づいて受け取っていかれるようになりたいものです。自分に触ることから始めてみませんか！　それが普通なのだと思いこんでしまわないで、何故ここにあるのか、どうなっているの、どうしたらいいの、何の役に立つの、私は何をしたらいいのか等私も一杯考えてしなければならない事が山程あります。それは瞬間でもありますし、また永遠につながっていくものだとも思います。

ときには緑を見つめ、木蔭で休ませてもらいましょう。疲れた眼や心を癒し、ひと時の憩いの場所を貸してくれると思います。このようにやさしく、大切な緑蔭をなくさないように、心にとめて守り育てたいのです。

『木を植えた人』〈注〉きっとお読みになったと思います。老農夫が永い年月をかけて、荒地に実を植えつづけ、その実はずっとずっと後で森をつくり、村には豊かな泉が湧き生命を甦らせ、幸を賜ってくれたのです。

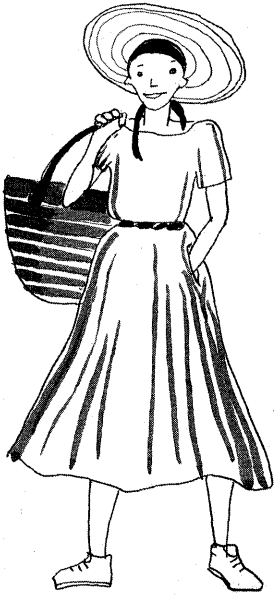
私たちも今みることができなくても、時を選んで種子を播き、木を植えていきたいもの

です。五十歳の桜の木も人差指くらいの時にこの庭の隅にきたのですが、枝を一杯にひろげ緑蔭をつくるようになりました。木蔭で昔話を伝えていくこともできるほどです。

根元には代替わりの時の為に毎年ほそい新芽も顔を出します。落ち葉を集めた穴からも落ちた実から二葉をつけた赤んぼ桜が時のくるのを待っています。

（元・武蔵野相愛幼稚園）

〈注〉『木を植えた人』ジャン・ジオノ著
原みち子訳　こぐま社



保育への視座(4)

――若い保育者の方々へ――

河邊　杲

保育の実際を見せていただくことは私にとって、とても得がたい研修体験の機会になっていてありがたいと思っているが、その反面保育の状況に何らかの影響をもたらしている一つの要素ともなっていることも見逃せない事実で、実際の現場では、子どもたちに対してはできるだけ明るく笑顔で接すると共にできるだけ保育者の心をくみとろうと努めて参加させてもらっている。参観者といえども単なる傍観者であってはならないという思いがある。当然、保育環境の中の一人であることは言うまでもない。

Y幼稚園で朝から保育を参観させてもらって午後幼児たちが帰ったあとの研究会で、担任のY先生が提示されたR子の指導事例から私の参観が幼児への影響だけでなく担任の先生へも大きな影響を与えていたことを聴いて、はっとさせられたことがある。またそのことからその担任の先生の日頃からひとりひとりの幼児たちにむけられて来た心のまなざ

しの深いことやその先生の感受性のすばらしさに感服したものである。

その時のY先生のお話を要約すると――

朝からあっちこっちの遊びに移り変わっていたR子を見ていて、友だちと一しょに遊びたいのかな、大きな子どもたちと同じことがしたいのかな、遊びが見つからないのかな、私（担任）と遊びたいのかな、などとあれこれ推察したりはしていた。しかしその時はバス遊びをしている子どもたちの中にいたのでバスに乗りながらR子の姿をときどき追ったりしていると、R子が河辺先生のそばへ行って一輪車に砂を入れてうれしそうに先生と話し合っている。河辺先生のにこやかなほほえみにR子もほほえみながら何かしきりに自分の思いを伝えている。聞いてもらおうとしている姿として受けとめられた。その時ハッとした。そうかR子はこれを求めていたのだ、担任の私が、いる、そのことだけではない。誰かとじっくり、自分とのかかわりの時間、雰囲気、状況を共有したかったのだと思った。……

そのあと砂で遊んでいるR子のところへ行き、私（担任）「R子ちゃん何つくっていたの？」R子「かき氷」私「先生ね、バスにのっていっぱい遊んだからのどがかわいて暑くなっちゃった。R子ちゃん、かき氷たべさせてくれる？」R子「うんいいよ」そう言って紙コップに砂をいれて私にさし出してくれた。しかしスプーンがない私「これだと食べられないね、かき氷になにがあるといい？」R子「スプーン」私「そうだね、スプーンがあるとすくえるね」早速スプーンを廃材庫からとって来てそれを使って私がR子の耳もとでサクサクと音を立てながらかき氷を食べた。その時、R子が、「あっ、かき氷の音が

する」R子は砂にスプーンをつきさして氷をまぜている音に対して、「かき氷の音」を発見した。私は「R子ちゃんいいことに気がついたね。本当にかき氷の音がするね。そうだこの音、R子ちゃんの発見、クラスのみんなにも教えてあげようか。」R子「うん」R子とかき氷の音をサクサクサクサクと立てながらしばらく二人だけの時間を共有することができた。私はその時R子とそうすることがR子にとって本当に大切なことなのだと思った。その時私の中には活動をどう発展させようかとかどのようなことばかけをするのがよいかなど何もなかった。ただ今しているR子の氷とその音への気付き、そのサクサクの音を一緒に二人だけの世界の中で聞いていたかった、と。そしてつづけて、ひとり遊びをしている子どものことが気になり私たちは教師が媒介となりながら周りの子どもたちに気づかせたり、その子どもが周りの子どもたちに少しずつ近づいてくれるようにねがったり、それをどうすればよいかを考えたりしがちだが、その以前にもっとその子がいまここでその子の見つけたことを教師と二人で共有してその世界にひたることがいかに大事であるかを知ることができました。と、

（そのあとR子はクラスのみんなに「まほうのかき氷。砂なんだけど、本当の氷と同じ音がするよ。聞かせてあげるね」と小声でひとりひとりにきかせてたのしんでいたようである）

このY先生の指導事例からうかがえるように、ひとり遊びをするR子のような子どもに対して、ゆったりとした姿勢でその子の時間を過ごされることの大事さに気づいて下さったことはその時の参観者としてそこに居合わせたことをとてもうれしく思った。又このよ

うに子どもも担任も参観者も三者共々に存在感が感じられるような保育なり、研修ができればとも感じた。これは常日頃、担任以外の園長先生や主任の先生方が保育の中に入られる場合も同じことが言えると思う。

ところで一学期も終盤にさしかかる頃になってまだ幼稚園生活に慣れ親しめない子どもたちが何人かいることがある。

親と離れにくい子、離れはしたが、保育室や廊下、テラスのところから動こうとしない子、が目につき気になる。その時、多くの先生は、四月、五月、六月と一日も早く幼稚園生活に慣れ親しんでほしいとねがわれ、その方向であれこれと苦労される様子を見聞する。

手を引いて誘い出したり、友だちをつくってその子どもに誘うよう指導されたりする。

特にやっとテラスで自分でひとり遊びができるようになったのを見ると、もう次のステップをと考えて、砂場などへ誘い出すことを考えてしまわれるが、私はこのような子どもに対してこそその時その場の時間を二人で過ごして下さることがとても大切なことだと思う。

母親から離れにくい（登園をいやがる子どもも含めて）ような子どもについても、「その原因がなにか」とか「それは自我の発達が云々」といったこと以前に、親も教師も「幼児は成長しようとする力を秘めてもっている」ことへの理解がどうなっているのかをお互いに自問自答していただきたい。「一日も早く幼稚園生活に慣れ親しんでほしい」ねがいをもちつつも、この子は「いま　ここ」では「どうありたいと思っているのか」に焦点をあててその子どもの心により添ってあげてほしい。テラスのところにじっと立ってばか

りの子どもに対しては、その心もちはどんな老練な先生にも見えるのはいまそこに立っている事実のみであろう。そして、その時その場の心は不明であろう。その時例えば「ここでみていたいのかな」という声かけはその子どもの心に寄り添うことの姿勢から出ることばかけであろう。「もしそこでみている方がよければそのままでもよいよ。」とあるがままを認めることによってその子は少しずつ緊張した気分から解放され、自由感を味わうようになり、そのことができてはじめて「成長しようとする力」が少しずつ働き出すのであることはすでに大学等で学んでこられている筈だと思うのだが、なかなかこのことが実践されていないのを残念に思う。

前述のY先生のR子ちゃんへの援助の姿勢もこの考え方や保育の態度の一連のものであると考えてよいでしょう。

子どもたちは、どのような状況にいても常に自分自身が一人の人間として尊重されているかどうかを敏感に感じとっているのだということを銘記しておいてほしい。

早く次の段階への発展とか、こうあってほしいという親たちや教師たちのねがいやねらいは大事だが、ややもすると、この子ども達が「尊重されているかどうか」の一点が欠如し易いのではないでしょうか。

（元・洗足学園短期大学）

故国を後にして(7)

知りてなお投げむ一塊(かい)の石

モーレンカンプふゆこ

猿の記録映画を見たことがある。動物園という限られた空間で、母親を失った子猿を育てた記録である。生まれたばかりの子猿に飼育員が哺乳ビンでミルクを飲ませ、おしめをして人間の赤子のように育てた。食事も排泄も自分でできるようになると、子猿は檻の中で、毛皮をはった木を母代りに、いろいろの行動実験をされるのである。おどろかされると、子猿は母代りの木にしがみつく。

いろいろの実験はさておき、私の心を強くとらえたのは、映画の最後の部分であった。自身が母となったその猿は、自分の子猿を抱こうとはしないのである。か弱い子猿が懸命に母に抱きつきに来るたびに、その母猿は子猿をまるでゴミのようにつまんでは床に投げる。母を求めてキイキイと泣く子猿の姿はまことに哀れであった。母猿の生い立ちを知っている我々には、彼女を憎む訳にもいかない。あの記録映画が私の教育観を決定的にしたように思う。

あの特別な一例を取り上げて自然の法則だなどと断定する気はないのだが、自身が母となって、私の母がした通りのことを私も自分の子にしているのに気づいてはっとすることがある。幸い私の母は、いろいろの欠点はあったろうが、ひとつの大切なことを教えてくれた。それは、彼女が私に幸せであってくれと切に願ってくれたことである。考えてみればあたりまえの事なのだが、私が幸せになるのを切に願ってくれる人がこの世に一人でも存在したということは、何と有難いことであろうか。それが私に対する絶対的信頼という形で表現されたので、どんな苦境に会っても、母を喜ばすには幸せにならなければとがんばることになる。

オランダは九州程の小国である。かつての植民地インドネシア人やスリナム人を大量に同化し、モロッコ人、トルコ人、ユーゴスラビア人等の出稼ぎ家族

をひきとり、ベトナム難民を受け入れ、スリランカ、南アフリカ、イラク、その他世界中からの亡命者たちが入国を待っている。都会の学校はさながら国際学校のようであり、差別などしていられないくらいだ。もちろん「ない」と言っては間違いになるのだが、子供達はどんな人種とも、どんな異文化とも、くったくなくすぐ交う。差別をする子供達は何と無邪気に親や囲りの大人の話をうけ売りしていることか。差別される側も同じである。不必要に身がまえる子供達の親は、きっと苦い思い出を抱いているに違いない。

子供達は、親を、社会を真似して育っていくものだと、つくづく思う。働きバチの父親不在の家庭で、どんな未来の父親が育っていくというのだろう。又オランダのように離婚離婚の社会で、どんな人間不信の人間が育っていくことだろう。人間改革社会改革する努力を怠って未来を子に託す、そんな虫の良い教育が成功するはずがない。子供を「教育」する前に、子供達が安心して親を、教育者を、社会を信頼し真似して育っていけるようにと切に思う。

私はこの原稿を、湾岸戦争ぼっ発直後に書いている。戦渦の中に生まれ、恐怖と憎しみに育った子供達は、成長してどんな子を、どんな国を育てていくことだろうか。

核を生む心は核でも滅ぼせずと知りてなお投げむ一塊(かい)の石

（歌人・アムステルダム補習校）

*** ある日の育児日記から ***
***** (19)

佐藤　和代

有は一か月を過ぎ、抱っこひもにいれて一緒に外出できるようになりました。これで我が家の生活も落ちつくな、と思ったのですが…。

先日有のおしりに小さな腫れ物を発見。肛門をふさぐような腫れ方なので、これじゃウンチが出ないじゃないの、と小児科へ連れて行きました。

先生は一目見て「あ、これは穴よ、穴」。穴？有には生まれつき、肛門のわきに小さな穴があったらしい。そこが化膿したため発見できたというわけで、赤ん坊には時々あることだそうです。

大学病院の小児外科を紹介されて、翌日受診しました。そこで簡単な外科手術。これは五分とかからなかったのですが、あとが大変でした。何しろ大学病院ですから、消毒してもらうだけの通院でも、半日がかりなのです。その上、一度圭を連れていったら、次の日から圭が39度の発熱。うーん、疲れたのかな、それとも病院でうつされたかな。

とにかく、有を横抱きにして、（おしりに傷があるので抱っこひもに入れられない！）、圭を乗せたベビーカーを片手でころがし、再び小児科へ。

これでは、落ちついた生活なんていつ戻るやら。当分ドタバタしそうな〝赤ちゃんのいる暮らし〟です。

圭・3歳、有・1か月。一緒に寝ると、こんなかんじです

幼児の笑いとその保育における意味（4）

四歳児の笑い

友定　啓子

一、おかしさの共有

四歳児のクラスは明るい感じがする。子どもたちがよく笑うからである。それも声を出して笑い合う。三歳児の段階で「おかしさ」がだんだんわかるようになってきたことを報告したが、四歳児になってそのおかしさを友達と共有し、笑い合うことを楽しむようになってきた。そうやって笑い合うことで、自分たちの仲間意識を作っているようにさえ見える。

〈記録1〉　C夫「英語って、こんなになってるんよね。ふじゃふじゃ～。アハハハー、アハハハー。変な英語ー」とぐるぐるとそれらしきものを書きながら自分で笑っている。

ここで英語が出てくるが、別にこの子が英語を知っているのではない。実はいつだったか、この子が観察メモをのぞきこんできて「何書いてんの」と聞いた時に、私が冗談半分に「英語」と答えていたのである。四歳児にメモをのぞきこまれると、中には読める子どももいて、自分の名前などに気が付いてしまうことがあるので、いつも文字をつなげて書いていた。で、それを「英語」と言ったのであった。C夫はそのことを覚えていたのだと思う。曲線でぐるぐるとつないで書いているように見えるものが「英語」だと。だから、自分でもそれらしく書ける。しかし一方で、文字はそれぞれちゃんとした一定の書き方があることも知りはじめている。自分の書いたものが本物ではないこともわかっているので、書きながらおかしくて、つい自分で笑ってしまうのである。

またこの記録で考えることは、なぜC夫がわざわざ観察者のところにやって来たのかということである。「英語がかける」だけであればほかの人のところでもいいのだから。それは、この冗談が通用する相手は観察者だけだという判断が働いたからだと思う。もともと観察者に教えてもらった「英語」なのだから。このようにこういうジョークは通用する範囲がある程度限られる。それが相手との親和関係の確認になるのである。おおげさに言えば、同じ文化の中でしか通用しないジョーク、おかしさといった問題につながっていくのである。

〈記録2〉

B子「ねー、ねー、はなみず！　アハハハハッ」

F子「さっき、M夫、おしりってー」笑う。

A子「22のななはん」

F子「ハッハッハ、ななはんって」

〈記録2〉は食事中の会話である。どの子も自分なりに考えておもしろいことを言っては、みんなを

笑わせようとしていることがわかる。もっとも人を笑わせる前に自分が笑ってしまっているけれども。

人を笑わせるのはけっこう難しくて、自分で「おかしい」状況を作らなければならない。「おかしさ」は論理的なのでつくることができる。何らかの形で「ずれ」を作ればいいのである。しかしこれが案外難しい。ふだんと違うあるいはみんなと違う行動をする。言葉でも、いつもと違うことを言う。しかも、これが「笑われる程度にコントロール」されている必要がある。

もう一つの方法は「タブー」に触れることである。すなわち「おしり」「うんち」「はなみず」の類の身体に関連することで普段は隠しておき、コントロール下におくべきものに触れることである。これは本人が、なぜそれがおかしいかを考える必要がない。何を言えば（すれば）人が笑うかということを体験的に知っていればよいのでラクである。

幼児はこの「何を言えば（すれば）大人が笑うか」についてはこちらが考える以上に敏感である。0歳児でも子どもがみずから大人を笑わせる行為に出るという記録例がある。一度ある行為をして、それが大人たちに笑われもてはやされると、再び自分からその行為をして見せるのである。子どもはここでなぜそれが大人たちに歓迎されるのかはわからない。しかしそれをすると喜ばれることは了解するようである。「社会化」とはこういうことの積み重ねであろう。笑いは「それでよい」という是認のサインということになる。

タブーに触れてみせるのも、ふざけたりおどけたりするのも、対人構造としては全く同じで、相手が笑うであろう行為をやってみて、相手との親和関係を樹立または確認しようという積極的な働きかけである。こうやってわざわざおもしろいことをしては笑い合う状況を作り、この人間関係に自分も積極的に参加するということを表明するのである。

〈記録3〉　E子の母親と姉のMちゃん（小二）が保育参加。K先生がみんなに「〇〇〇Mちゃん」と紹介する。子どもたちは口々に「Mちゃん」「Mちゃん」と言う。そこへ、O先生が「M先生」と言うと、一瞬、間をおいて「ウヘーヘヘヘ」「ハハハハハハハ」と大笑いの渦。

これにはクラス中が大笑いをした。Mちゃんは小学二年でたしかにちょっとお姉さんだけれど、級友のお姉さんだし、自分たちの仲間というとらえ方をしていたと思う。そういう親近感を抱いて「Mちゃん」とつぶやいて自分に言い聞かせているところへ、思いがけなく「先生」という自分たちと最も遠い役割を付与されたので、そのあまりの落差に驚き、そしてすぐにやっぱり先生というには無理があることに気づいたのだと思う。この笑いは「えー、そんなあー、おかしいよー」という感じである。言った先生も言われた当人も笑っている。

こういうずれが、クラス全体で共有できるのである。もちろん、そこには意味がわからずただ笑いそのものに同調した子どもも含まれているだろうけれ

ども、それにしても「笑いの輪」の中にみんなが入るということがたくまずして行為されている。こうしたかたちで、ひとつの集団としての同調感情が重ねられて集団意識が形成されるのかも知れない。

二、劇ー虚構の世界と他者の目

四歳児になって、行事の場面が多くなってきた。劇やセレモニーなど、自分の思いのままに動くのではない、他者をも視野に入れた行動を要求される。

〈記録4〉 劇「おむすびころりん」の練習のため、会場のホールに行く。E子、小道具のふろしきを見て笑う。まさかりではしゃぐ。恥ずかしいのか、歯がむき出しになっている。

この記録は劇の練習に入る前である。会場のホールに行って、劇の小道具を見た時に恥ずかしそうに笑ったのである。ここでこの子は何に恥ずかしい思いをしたのだろうか。小道具を見て、これをつけておばあさんになってしまう自分、そしてこの小道具たちに象徴されるようなもう一つの世界が意識されたのであろう。

「恥ずかしい」とは「自分が他者の目にさらされる」[1]ことに対する自我の防衛感覚である。本来の自分と他者の目に映る自分、その二つの自分の不整合に耐えきれず笑うのである。たぶん、練習が始まれば笑いは消えるであろう。そこでもし劇という虚構の世界に入り切れず本来の自分をひきずっていると、恥ずかしさの笑顔が残ってしまう。

劇はたいてい見せるためにやるので、振りつけなど子どもにかなりの無理を強いることがある。たとえば出演者同士が向かい合って話す場面で、観客席を見て話すようにという指示がでることがある。正直な子は混乱してなかなかそのとおりにできない。それを受け入れるためには、自分の中に観客というもうひとつの視点を意識的に取り込まねばならな

い。そうするとたいてい自分を殺すことになり、笑顔が消えてしまう。

ここが劇の難しいところで、もう一つの虚構の世界にはいれるかどうか、そして観客という他者の目を持つことができるかという二つの点で自分を越えなければならないのである。卒園式などのセレモニーにも同様のことが言える。多分こういうことが本当にできるのは、もっと大きくなってからだと思う。

おもしろいことに、劇の練習のさなかにあまり笑顔は出ない。出るのは練習の合間である。一生懸命やっている子を見ている子とか、休憩の時に別の人の役をやっている時とかである。踊りも、舞台の上でなく下でやっている時に笑顔がでる。運動会の後に「運動会ごっこ」を嬉々として楽しむ姿に似ている。本番後や、練習の合間に子どもたちが楽しむというのは、他者の目を切り捨てて、自分たちだけで本来の楽しさを共有できるからであろう。

三、人を笑う

三歳児で、自分が他者に受け入れられているかどうかに敏感になってきたことを報告した。集団の規範からのずれもわかり、笑われることを気にするようになった。その時は自分はそれを受ける人であったが、今度はそれを他者にも向け始めたように見える。

〈記録5〉 文集のカットをそれぞれ書くことになった。B夫、隣の男児のものを見て、「なんだこりゃ？きったねえー」と笑う。用紙の中央にマジックでなぐりがきをしていて、すり切れて穴があいていたのである。それを聞いて、H子も覗き込み、声を出して笑う。

その後、B夫「Vスリーがちょっと曲がった」と周りを見渡して、観察者にニッコリ。

四歳児になって、人を笑う、自分より劣ったものを笑うという行為が出てきた。他にもいくつか記録があるが、課題活動の時が多くそれも絵を描いている時が多い。ちょうど四歳児というのは、絵を描く時に形をとることを意識的に努力し始める時である。三歳児では今一つ形もおぼつかなく、そういう子どもが他にもたくさんいるし、「自分としての絵」であればそれでよかった。しかし四歳児になって、絵とは一定の形を持つものだと気づき、ほかの人にもわかる絵でなければならないと思い、そのように励まされ、努力し、評価され始める。そういう時に、思いきり錯画を描いている子どもは目立つ。一生懸命、形にエネルギーを注いでいる子どもたちにしてみれば、形がないことがおかしい、それは絵ではないと思うのであろう。この基準は人にも向けられているが、自分にも向けられていて、この記録でも、このあと少し形がゆがんでしまった自分の絵について、B夫はあたりを気にして観察者にニッコリ笑う。この笑顔は、こんな自分だけれども認めてほしいという思いであろう。

〈記録6〉　じゅず玉を採りに出かける途中、N夫のパ

ンツが一部、ズボンからはみ出ているのを先生が見つけ、「N君、パンツ」と言う。N夫、パンツを入れ直すが、そのあいだ中、となりの男児が「アッハッハッハ、おかしいよー、こんなとこで、パンツ出してー」と笑う。別の女児も「笑われるよー」と長い間笑い、本人を責める。

これも人の失敗を笑うという記録である。私はあわてて一生懸命身じまいをしているN夫にたたみかけるように投げつけられる笑いに、そんなに笑わなくてもいいじゃないという思いを持った。そして、ハッと思いあたった。この子たちは去年「人に笑われるよ」といわれて、身じまいを正すというしつけを受けていたことに。そんなことがこんなにストレートに出るのかとはじめは驚いたが、子どもが行動レベルで理解していたと考えればそうなっても不思議ではない。もちろん保育者の意図は身じまいをきちんとしなさいということであったのだが、子どもたちの方はそういう人は笑ってもよいと受け止めていたのかもしれない。

この問題は非常に一般的なもので、その保育者だけでなく別の保育者でも言っただろうし、それ以上に親や周りの人からも言われているであろう。そんなふうに私たちは、外側から「笑われるよ」という圧力で行動を規制していくやり方を無意識のうちにとってしまっている。「笑い」が社会的制裁の機能をもっていることは前回のべた。それを時には使っていいじゃないかとも思えるけれど、受ける側のしんどさ、釈明のきかない無慈悲さ、結果主義は子どもには重すぎるのではないかと思う。「笑われるよ」と言って、不特定の他者に責任転嫁をせずに、「きれいにしてね」「私はいやだな」とはっきり言って子どもに思いを伝える方がいいと思う。

「笑う、笑われる」ことに関して言えば、四歳児になって、よく人を笑う子とよく人に笑われる子が出てきたように思う。どちらも数名である。よく笑

う子は自分の枠組みを強く持っている子で、ほかの子がそれからはずれることに敏感である。その枠組みは自分にも向けられているし、大人の要求する枠組みにも敏感な子である。しかし、なぜ子ども自身がそのような枠組みをもつのかと考えれば、やはりこれは大人から要求されたと考えざるをえない。それが子どもの本来の気持ちにそわないことであっても、努力して受け入れた子が、ほかの子もそうすべきだと考えるのは当然であろう。

一方笑われる子は、笑われても反撃に出ないし、出られない子である。笑う子どもはそれを知っているので、笑うことができる。どうして出ないのかというと、それを攻撃とは受けとっていないことも考えられる。笑った本人も攻撃と思っていないだろう。ただおかしいから正直に笑ったのだと。笑われた子どもは笑われて嫌だなという感じは持っているだろう。しかし笑っているだけだから、そこに明確な攻撃の意図をキャッチできなければそれに「反撃」するエネルギーを出すのは難しい。笑われて「怒る」という記録が現れるのは五歳児である。また反撃するか否かは、相手との力関係で決定される。笑う方も笑われる方も相手を見ているように思える。

（山口大学）

参考文献

(1) H・M・リンド著、鑪幹八郎他訳「恥とアイデンティティ」北大路書房、昭和五八年

一学期も終わりに近づき、梅雨あけ前のくもりがちなお天気の中、空を気にしながら、七夕の飾りつけをされている園も多いのではないでしょうか。

くす玉などの飾りものを作ったり、願いごとや、将来〇〇になりたい、などと書いた短冊を笹竹につるし、字が上手になるように、又、子どもの成長を願ってお祭りします。それに中国から伝えられた、織り姫、彦星のお話が加わり、七月の夜空を飾ります。

皆様の園では、子ども達に、どんなお話をしていらっしゃいますか？

＊

私はこの年になっても、残念なことに〝天の川〟をはっきりと意識して見たことがありません。東京の空は明かるすぎて、大きな星しか見えませんし、信州の山の上で見た満天の星は、あまりの数の多さにみとれてしまい、天の川を見つけることができませんでした。

星を見ている時は、現実を離れ、何かロマンティックな気持ちになります。ところが今は空も汚れ、澄んだ星空を見る機会が少なくなっています。特に子どもには、夜も更けてあたりがまっ暗にならないとよく見えないので、見る機会がありません。そこで、プラネタリウムや星座表でお勉強……ということになるのでしょうが、そこには、感動や興奮はわいてこないのです。

学生時代、合宿で行った八ヶ岳の寮で夜中に屋上に上がり、皆で、満天の星空をただうっとりとながめていたこと。又、何十年に一回の大流星群が関東地方で見られるというので、父と一緒に、埼玉の入間川の上流の河原までわざわざ見に行ったこと。最近では今年のお正月、東京にしてはめずらしく星がたくさん見えたので、寝ていた娘をおこしてながめたこと。……どれも、ただながめていただけのことなのですが、何万光年も離れた宇宙から届く小さな輝きの魅力は、私たちに大きなロマンを与えてくれます。（K）

幼児の教育　第九十一巻　第七号
（一九九二年七月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

平成四年七月一日　発行
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話〇三―三二九二―七七八一

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

3歳児保育のすべて

これ1冊で3歳児保育のすべてがわかる現場必携の書

新幼稚園教育要領、新保育所保育指針の理念にそって、これからの3歳児保育の考え方、在り方と実際が説明されています。発達の考え方と見方、3歳児の生活の特徴、援助の仕方、指導計画の考え方と作り方、そしてポイントをおさえたQ&Aが3歳児保育のすべてを掲載してあります。

柴崎正行・関口はつ江・藤野敬子・阿部明子・吉村真理子 共編著

B5判・304頁・定価3,300円(税込)

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

年齢別保育実践シリーズ〈全5巻〉

このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。この課題に具体的に応えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。　編集責任　東京学芸大学教授　小川博久

第1巻　0~1歳児の遊びが育つ　編集／小川清美
第2巻　2歳児の遊びが育つ　編集／野本茂夫
第3巻　3歳児の遊びが育つ　編集／平山許江
第4巻　4~5歳児の遊びが育つ　——遊びの魅力——　編集／河邊貴子・戸田雅美
第5巻　4~5歳児の遊びが育つ　——遊びと保育者——　編集／河邊貴子・戸田雅美

A5判　1~4巻　264頁　5巻　288頁　定価各 2,000円(税込)

全3巻セット（第3巻~第5巻）セット定価 6,000円(税込)

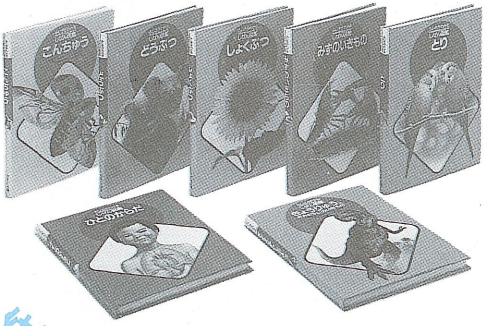
全5巻セット（第1巻~第5巻）セット定価10,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

ふしぎがわかる
しぜん図鑑

監修／東京大学名誉教授　水野丈夫



第1巻 **こんちゅう** 全国学校図書館協議会選定図書
●監修
前東京都多摩動物公園園長　矢島 稔

第2巻 **どうぶつ** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書 第25回造本装幀コンクール賞受賞
●監修
東京都多摩動物公園園長　増井光子

第3巻 **しょくぶつ** 全国学校図書館協議会選定図書
●監修
園芸研究家　浅山英一

第4巻 **みずのいきもの** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書
●監修
国立科学博物館　武田正倫

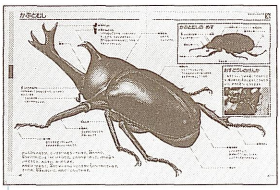
第5巻 **とり** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書
●監修
東邦大学理学部　長谷川 博

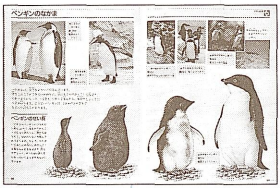
新刊 第6巻 **ひとのからだ**
●監修
愛育病院小児科部長　岡本 曉

新刊 第7巻 **きょうりゅう**
●監修
国立科学博物館　小畠郁生

A4判・上製本・本文116頁
定価各2,000円(税込)・セット定価14,000円(税込)

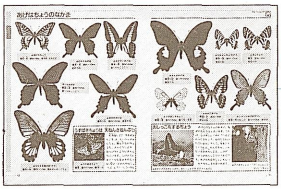
幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。





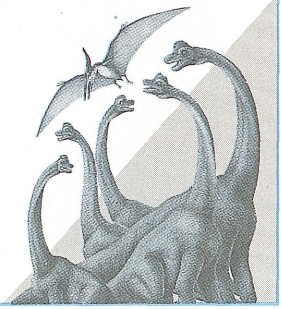
調べる、確める、
知ることが楽しくなる
美しいイラストと
豊富な写真。

●写真よりも詳しくわかるスーパーリアリズム・イラストのワイド画面。自然界への興味や関心を高めます。動植物のふしぎさやおもしろさが、ワイドにせまってきます。



●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える画面。豊富で美しいイラストと写真の組み合わせで、わかりやすい構成は、子どもたちのさまざまな疑問に答えてくれます。

●基本的な図鑑として十分に活用できる豊富な情報。子どもたちにとって新しい発見もたくさん用意しました。子どもたちに探究心や科学する心が育つように、応援します。



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館